

# 中学校知的障害特別支援学級の授業づくり

## －中学校入学時から特別支援学級に入級したNへの実践から－

雨宮 瑞穂\*

### I. はじめに ～Nの入級までの経過～

特別支援学級に中途から入級してくる子どもの中には、通常の学級でとことん不適応に陥っていた生徒がいる。本当はクラスの仲間とつながりたいのに、仲間とつながれず、嫌な思いや苦しい思いをしながらも、それを自分だけではうまく解決できず、どうしてよいかわからない状態にいる。現在、知的障害特別支援学級に在籍するNもそうであった。

小学校から引き継いだNの実態は以下のようなものであった。入学時から通常の学級に在籍していたが、1,2年の時は、ことばの教室へ週一回通級して指導を受けていた。3,4年の時は、「個別の指導計画」が作成され、担任を中心とした学年学校体制で、通常の学級で支援がされた。しかし、高学年になると、しだいに周囲との差を感じるようになっていった。

#### ○学習面

算数の計算問題は比較的正確にすることができ、時折挙手して発言することもある。文章問題は題意を正確に捉えられずに誤答することも多い。作図や図画工作等の作業は難しい。文章を書く等については時間がかかるが、以前よりは意味の通った内容が記述できるようになってきている。文字も丁寧さに欠け、止めたりはねたりといった細かなところまで意識しきれず、読み取るのが難しい文字を書くが、意識しているときは正確な文字が書けるようになってきている。音読などもたどたどしいが正確に読もうと努力している。

#### ○生活面

身の回りの整理整頓が苦手で、机の中や袋の中は乱雑になっていることが多い。作業に時間がかかり雑である。言葉の発音も不明瞭で自分の思いを相手に伝えることが苦手である。偏食傾向が強く、食べる量も少ない。縄跳び等、協応動作が必要な運動はうまくできない。

#### ○社会性

自分がしようとしていたことを他人がしてしまったり、遅いことに注意などを受けたりすると（気に入らないと）、へそを曲げて床に寝転んだり、鼻水を多量に出しながら泣き伏せたりしてしまうことがある。しばらく時間をおくとけろっとしていることが多く、長くトラブルを引きずることはあまりない。できるのにしようとしなかったり、周りがかまってくれることを期待したりして

---

\* 甲府市立東中学校

いる面も感じる。思いがうまく言葉で伝えられないこともあり、手をすぐに出してトラブルになることもある。やりたいのにできない…という点で本人もジレンマがあり不安定になってしまう面もある。

周囲と比較して「自分は何をやってもだめだ」と悲観的になっているため、支援を素直に受け入れず、拒否したり、失敗を恐れて回避したりするような行動は、「現実から逃げている」「せっかく助けてあげようと思っているのに指導にのらない」と誤解され、また叱責を受けて、さらに本人の自尊感情を低下させていったようである。

そうやって学校や家庭において、正当に評価されたり、褒められたりすることが少なく、不適切な関わりしか与えられないまま過ごしていくうちに、心身に不調をきたし、不登校状態に陥ってしまった。

小学校では県の教育委員会からの専門家も交えて校内支援委員会を開き、医療、心理関係での相談も視野に精神保健関係の公的な相談機関の診察も勧めた。また、進学にあたり中学校からの特別支援学級入級を視野に入れ、今後の支援のあり方について保護者と懇談を重ねた。

その結果、保護者も特別支援学級で本人の能力にあった生活・学習の支援を受けながら、楽しく充実した中学校生活を送ることを望むようになり、中学校からの入級が決まった。

## II. Nの実態

小学6年の時の WISC-III では、言語性知能指数[VIQ] (82) , 動作性知能指数[PIQ] (71), 全検査知能指数[FIQ] (74) であった。S-M 社会生活能力検査は、生活年齢 (11歳6月), 社会生活年齢 (8歳3月), 社会生活指数[SQ] (72) という検査結果で、知的障害の程度は境界線であった。

保護者は、本人の家庭での生活の様子や行動を見ていると、社会において自立した生活をしていけるかを心配しており、将来的なこと (社会人としての自立) についても考え始めていた。そのため、「Nが将来、周囲とコミュニケーションを上手にとりながら自立した社会人として生活していくことができるようにさせたい。」と願っていた。N自身も、自分にあった進度で学習を行うこと、安定した環境の中で生活することを望んでいた。

入学してきたNの様子を観察すると、小学生からの学習面・生活面でのできなかった経験の中で、苦手意識が積み上げられ、孤立化し、強い劣等感を抱いているように感じた。

特に、気になったのは発言と運動面であった。発言する場面では、言葉の発音も不明瞭で自信がないのか、自分が発言する順番になってもとどろどろしくなったり、止まったりすることが多く、自分の思いを相手に伝えることが苦手なようであった。

運動面では、走り方がぎこちなく、体操も動きを真似することができず、手と足の動きがバラバラになってしまい、協応動作が苦手であった。持久力も弱く、すぐに疲れてしまい、運動経験の少なさを感じた。そのため、一人で自転車通学をすることができず、保護

者が毎日、自家用車で送迎した。しかし、体力不足のわりに仲間と一緒に体を動かすことは好きであった。

社会や数学の授業をしてみると、さまざまな内容の理解力に優れ、たくさんの知識を身につけることが期待できそうに思えた。しかし、家庭学習の習慣化ができていないためか、学力として定着せず、伸び悩んでいた。また、目標や課題意識をもち、積極的に自分を生かそうと、意欲をもって学習活動に取り組む様子が感じられず、授業での挙手もほとんどなかった。学習中はのろのろと緩慢であり、学習経験の不足が学習能力の低さを一層助長していた。もっと熱心に粘り強く学習に取り組めるように指導しないと、理解力がある分もったいないと感じた。

### Ⅲ. 指導の方針や工夫点 ～教育課程の編成～

これまでの情報とNの実態を総合して考えると、特別支援学級において個別に指導・支援し確実に力を付けさせながら、交流も少しずつ進めて、対人関係の深まりやコミュニケーション能力の育成をねらっていった方がよいと考え、教育課程を以下のように編成した。

- ・朝の会、帰りの会、清掃は特別支援学級で行う。昼食は交流学級で食べる。
- ・国語、社会、数学、理科、英語、美術、家庭科の教科指導は、特別支援学級において下学年の学習内容を取り扱い、教科担任と共通理解を図りながら、楽しく学校生活を送れるようにする。
- ・音楽、保健体育、技術の実技教科は交流学級で受けるが、付添はしない。ただし、学習内容の知識理解や技能・表現が「できる・できない」という観点ではなく、興味関心をもって楽しく学習に参加できることをねらいとする。
- ・交流学級の生徒との関わりをできるだけ設定し、その中で社会性も養いながら、いろいろな活動を通して、「自分にもできるんだ。」という経験や仲間から認めてもらう経験を積みせ、自信をつけさせる。
- ・総合的な学習の時間は交流学級で学年の内容を学習するほか、特別支援学級でも学習を行い、内容として栽培活動や落ち葉清掃作業等を取り上げる。年間を通して、自立活動の指導を特設の1時間と、各教科や学級活動・道徳・総合的な学習の時間の中で行う。

こうして、Nが得意とする教科学習において、適切な関わりや支援によって成功体験を積み、自尊心を高めながら学校生活を送れるようにすることから取り組みを始めた。

## IV. 指導の経過及び結果

### 1. 学力を高める授業づくり ～視覚教材で楽しくわかる授業を～

#### (1) 一斉学習と個別学習の二部構成

授業の第一部は、NHKの学校放送番組を全員で視聴することから始める。それは、本時の授業に見通しと興味をもたせ、学習内容を視覚的にとらえさせることで、どの生徒にもわかる楽しい授業の導入になるからである。特に最近の番組は堅苦しい解説は少なく、最新の情報を使い、学習に必要な基礎的・基本的な内容と発展的な部分を軽快なトークと映像・音楽を駆使して10～15分にわかりやすくまとめている。インターネットを使い、「NHK 学校放送オンライン（社会・算数）」や「高校講座（数学）」のホームページからいつでも視聴が可能になっている。

もちろん、教材を視聴ただけで満足し、学習内容が全部わかったような気になってしまわないように、視聴後は、各自の考えを発表させたり、ワークシートをまとめさせながら、自分で学習内容を確認し整理できるようにしている。

第二部は、個別の学習である。教師が付き添って学ばせる教材と、生徒が一人で取り組めるように工夫した教材を準備しておき、それぞれが一定時間、一人で集中して課題に取り組めるように指導している。将来、与えられた仕事を自分で最後までやり遂げる力を付けたいと考えている。こうして、授業の流れが決まっていれば、生徒たちは主体的に活動する。授業の見通しがつけば自信をもって授業に取り組めるようになる。

授業はテンポとメリハリが大切なので、生徒の様子を見ながら、「あまりよくわかっていないようだ」と感じたら、範読して聞かせたり、指名読みをさせたり、アンダーラインを引かせたり、プリント問題をやらせるなど作業的な学習も取り入れて、授業に変化をもたせながら、少しでも飽きさせないように工夫をして学習内容の定着を図っている。

そして授業の最後に行う、完成させたワークシートを各自の教科別ファイルに綴じる作業は、学習内容の整理と学習への参加、充実感を自覚できる大切な場面になっている。

また、障害が多様化する特別支援学級内で、全ての生徒に対して同一の指導目標や内容に基づく授業を行うことは難しい。そのため、学習面でつまずきのある生徒に一斉指導の中で全てを一律に習得させることは求めず、学級全体の目標設定と個別の目標設定を分けて考えることが大切であると感じている。そうすることで教師・生徒双方に授業でのストレスが緩和され、精神的なゆとりが生まれることによって指導効率と学習効果を上げることにつながると考えている。授業を細分化して一斉指導と個別指導の場面を組み合わせ、学習における様々な配慮をしながら、それぞれの生徒に達成感を味わわせていけば、本人なりに学習意欲も高まり、飽きずに授業についていくことができる。そうすることで授業の流れが途絶えずに、全体の効果的な支援につながり、全員が楽しく、わかる、面白い授業になると実感している。

## (2)「数学」の授業づくり

教科指導の中では、特に数学の授業を大切にしている。その理由や支援のポイントなどについて以下のように考えている。

### ①「数学」指導が大切である理由

「新しいことができた・わかった」という喜びを味わえる「認知・認識」の教科である。苦手な教科が数学であることが多い。しかし、基礎学力としてはやはり「読み・書き・計算」は欠かせず、本人も保護者も数学の力が伸びてこそ学力がついたと思うようである。数学が「できる」「わかる」という実感は、他の困難な要素を引き上げていくためにも大きな力を発揮するものとなると思う。

数学の学習（どの教科でも）は、単により成績をとるために行うものではなく、日々の生活をより充実させるために学習するはずである。基本的な「読み・書き・計算」に関する知識を土台にして、日常生活で使用する頻度が高い「数量」に関する知識を応用することや、必要な情報を自力で得ることなどを教科の学習を通じて習得させたい。

その一方、中学校には高校入試という関門があり、特別支援学級に在籍していても特別支援学校ではなく、高校進学を強く希望する保護者がいることも事実で、その場合、入試科目で、ある程度の得点アップが期待できる教科として数学の指導は大切になってくる。

中学生で「数学」が苦手な生徒は、小学校段階で学習する九九や割り算、小数や分数の計算などの基礎的な部分でつまずきがある。しかし、小学生の頃は混乱して理解できなかったことでも、中学生になり、他の学習能力が高まってきているので、個別指導で丁寧に教えると理解できることが多い。

### ②生活に役立つ身近な数学を

毎日の生活では、物を買うときにお金を使ったり、時刻や時間を見て外出したり、調理するときに量をはかったり、予定を考えたりすることがある。特別支援学級の生徒にとっては毎日の生活に関連するところから学習する方がわかりやすい。

だからといって、「日常生活にすぐに役立つから」と、時計や金銭の練習や操作だけといった授業にならないように注意している。あくまで、知的障害児教育における数学科も、「数量や図形に関する初歩的なことを理解し、それを扱う能力と態度を育てる（学習指導要領）」ことが目標であり、「理解する」ことに力点を置き、「認識を育てる」教科として授業づくりをすることが必要であると考えている。

生徒にとって「それをやる必然性」が何もない授業は、面白みに欠ける授業となってしまう。そうした授業にならないようにするためには、教科指導が生徒にとって意味のある学習であるとより強く感じさせることが大切である。

例えば、3人分にピザを切り分け、飲み物を分けることは面積や分数に関する内容であると意識化させたり、「大きな数」では、買い物で支払う商品の値段を意識させ、3桁の

数の読み書きと大小の理解をさせている。特別支援学級の担任として、将来の社会との関わりを念頭に自立を目標において、「この学習を習得すれば生活がより便利で快適に送れるようになる」と必要性和意義を説くようにしている。

特に、数学についての知識や技能は、数学の時間だけでなく、社会科や生活単元学習、総合的な学習の時間でも使うことができ、生活に生かされ、より広がりのある生活や、将来の自立した社会生活につなげることができる。

授業では、数学の系統性を意識しながら、小学校の学習内容の復習から始めて、理解の様子を見ながら、「行きつ戻りつ」の指導をしている。また、同じ教材を使いながらも、A君には10の分解合成、Bさんには繰り上がりの足し算というように、個々の生徒への課題を変えながら進めて、授業の中に思考活動を作り、生徒自らが頭を使って考え、活動し、賢くなるようにしている。

ただし、数学は学習内容も多く、特別支援学級の生徒に全ての領域の内容を完全に理解させていくことは難しい。こういう場合、無理矢理教え込もうとすると、必ずどこかで無理が生じ、学習意欲がなくなったり、教師との関係が悪くなったり、極端な場合は、算数・数学の授業が苦痛に耐えるためだけの時間になってしまう。それぞれの生徒のペースに合わせ、無理なく学習できる内容と量を選択するようにしたい。経験上、今わからなくても徐々に力がつき、本人も驚くくらい意外に簡単に理解できる時が必ずくることを実感しているので、焦らず、気を長くもって指導するように心がけている。

### ③具体的な支援のポイント

解き方を重視することが大切である。数学を指導する上で、「なぜそうなるのか」という「考え方」や「成り立ち」を重視することが多い。もちろんそれが大切であることは言うまでもないが、数学が苦手な生徒にとって、この「考え方」や「式の成り立ち」を説明されることは、それだけ情報量も多くなり、かえって混乱を招くこともある。それよりも、「このときはこう解く」というように「解き方」をシンプルに伝える方がよい場合もある。例えば、文章題では、「合わせて何個と書かれてあれば足し算」とか、「○人で分けると書かれてあれば割り算」とキーワードをおさえてパターンで教えてしまう。もちろん、応用的な問題には対応できず限界があるが、まずは基本的な計算問題や文章題ができるようになれば、そこに十分価値があるのではないかと考える。

道具を活用することである。数学に楽しく取り組ませていくために、道具を積極的に活用している。よく使うのが「電卓」である。基礎的な計算は筆算を練習させてできるようにさせるが、小数同士の計算では、式を立てたら計算機を使って正しい答えを出してもよいことにしている。それは、正しく電卓を打つ習慣をつけることにもつながる。「指」も、素早く正確に計算するための便利な道具であると思う。中学生になると特別支援学級でも恥ずかしくて、計算をするときに机の下に指を隠しながら苦勞している様子を見る。しかし、暗算で混乱して計算ができなくなるよりは、「指」を使っても計算ができる方がよ

いと考える。九九も全部覚えられなかったら、九九表を見てもよいことにしている。その方が生徒にとってストレスが少なくなる。

さまざまな計算や操作が、道具を使わず頭の中だけでできればよいし、そうなってほしいが、それが難しい場合、道具を使うことで問題に取り組みやすくなるなら、その方がよいと考えている。大切なのは「できた」「わかった」という学習体験である。

#### ④取り組みたい中学校数学の領域

最小公倍数と最大公約数についてである。分数の計算を復習していくと、どうしても通分や約分が出てくる。苦手意識を感じ、つまずきやすいところであるが、諦めず何度も練習していくと少しずつできるようになる。それは、最小公倍数と最大公約数の学習にもなっている。かけ算と割り算の練習にもなるので、取り組んでみるとよい。

正負の数についてである。確かにプラスとマイナスの概念の理解は難しいが、計算自体は一桁の加減計算から始まるので、少しの練習で比較的早く計算のルールを習得できる。そして、何と言っても中学校入学後で習う学習内容なので、主に小学校の算数の領域を学習している特別支援学級の生徒にとっては、中学生としてのプライドを感じられる領域でもあり、大切であると考ええる。

文字式についてである。数字以外の「a, b, x, y」などのアルファベットが式の中にあることに違和感を覚え、理解しにくいようである。しかし、これも正負の数と同様、計算自体は一桁の加減計算から始まるので、少しの練習で比較的早く計算のルールを習得できる領域なので是非扱いたい。

一次方程式についてである。正負の数と文字式の計算ができるようになれば、方程式も必ず解けるようになる。

図形についてである。図形でつまずきやすいのは作図で、定規や分度器の目盛りがうまく読めない生徒や、コンパスをうまく使えない生徒が多く見られる。操作自体は好きな場合が多いので、少し時間をとって様子を観察し、どこにつまずいているか、形や線を視覚的に正しく捉えることが苦手なのか、指先の不器用さがあってうまく描けないのか、目と手の協応動作が苦手なのかなどに気を配りながら、つまずきの原因を明らかにする。そして、「0をどこに合わせたらよいのか」、ものさしを左手でしっかりと押さえることを教え、「1cm, 2cm・・・」と一緒に読んで確認しながら目盛りを読み取らせる。分度器では、どこに0を合わせるのかを確認し、測る角度の直線に色をつけたりするとよい。コンパスでは、中心がずれないように針が刺さりやすいものの上に用紙をおいて、教師が手を添えて動かし方を見せながら、作図のコツを一つ一つ細かく指導していく。

そうやって、実際に定規やコンパスを使って測定や作図を繰り返し練習させて、慣れさせることが大切である。これまでの経験から、「難しい、苦手だ。」と感じ、つまずいてしまった学習内容については、諦めさせず励みしながら、時間をかけて適切な方法で難しさを軽減させ、垂直二等分線や角の二等分線も作図できるようにして自信をつけさせたい。

## 2. 一人一人の課題に寄り添った支援～自立活動を生かした「保健体育」の授業づくり～

近年、知的障害特別支援学級でも知的発達の遅れだけではなく、言語の面で「理解言語の程度に比較して、表出言語が極めて少ない」とか、情緒面で「心理状態が不安定になりやすい」などのさまざまな配慮を必要とする生徒が在籍するようになってきた。また、自閉症や情緒障害の特性をもつ生徒の増加傾向が見られ、近年、中学校にも自閉症・情緒障害特別支援学級が新たに設置されることがますます増えている。そのため、これまでの発達の遅れに応じた教科内容の設定だけでは十分な指導ができなくなっている状況がいくつかの特別支援学級から報告されている。このような場合は、一人一人の知的発達の状態や行動上の課題を考慮し、個に応じた指導内容を設定した「自立活動の指導」を適切に取り入れ、できることを増やして生活しやすくすることが大切になる。

体育の授業は、通常の学級で交流教科として週1時間実施しているほかに、生徒の発達段階や運動能力を考慮しながら、特別支援学級としても週2時間、バドミントンなどの軽スポーツや自転車などの運動を行っている。知的な遅れだけでなく、自閉症傾向、多動傾向を併せもつ生徒もいる特別支援学級での小集団指導ができるこの時間は、体力や運動技能の向上という体育科としての目標と、他の生徒たちと一緒にゲームができ、勝ち負けの感情のコントロールや適切な言葉のかけ方などを自然なやりとりのなかで指導できる「自立活動の時間」としても捉えている。

運動への意欲が高い生徒はもちろん、運動は苦手でも特別支援学級での体育の授業は全員が積極的に取り組む姿勢が見られる。特にゲームを中心とした活動には積極的に取り組み、楽しんで活動する姿が多く見られる。また、練習の結果が記録の向上につながる陸上競技や勝敗が決まる球技でも、勝負を意識して頑張る姿が見られている。このような実態から、指導に当たっては教師も一緒に運動して楽しい雰囲気づくりに努めながら、できることを実感する活動を設定してストレスを発散させて心理的な安定を図るとともに、うまくできた時には賞賛の言葉がけをし、自己効力感を高める授業を展開するようにしている。

### (1) 指導事例としてのバドミントン

バドミントンはその特質から特別支援学級の生徒にとって、できる楽しさを実感しやすく、有効な運動指導種目と考えている。例えば、キャッチボールと違い、シャトルは軽量で恐怖心を感じさせない。ルールも理解しやすく、早い時期に競技へと展開でき、ゲームを楽しめる。そして何より二人組でラリーを20～30回程度続けるためには、発達障害児が苦手としている「相手との間」や「相手に合わせる調整力」などが要求される。自分勝手に打つのではなく、常に相手が打ち返しやすいうように調整しながら打つことが必要で、その大切な社会スキルを獲得するためにバドミントンの運動に取り組むことは大変価値のあるものと考えている。ラリーを続けられるようになればゲームが楽しめ、余暇でもスポーツを楽しむことができる。このようにバドミントンは生徒たちの社会スキル展開のための

入り口になると考えている。

基本となる「ラリーを長く続けること」に主眼を置き、運動への苦手意識を克服できるようにしたい。さらに練習の成果をゲームの中で発表し合う機会を設け、学習の成果を生徒同士で認め合えるようにしたい。また、将来の社会との関わりを念頭に、自立を目標にして、運動という教材を使って「生きる力」を育てていきたいと考えている。指示通りに活動することや、互いに協力すること、集団行動での基本的な行動のルール、仲間（社会）、自己実現（喜び、自信）、課題達成までの過程（プレッシャーの克服、努力）などについても指導し、正しい態度で学習できるようにしていきたい。

## (2)「バドミントン」の授業展開例

	学習活動	指導上の留意点・支援	内容項目
導 入 10分	<p><b>【全体での活動】</b></p> <p>1. 用具の準備</p> <p>2. 集合・整列・挨拶</p> <p>3. 準備運動：ランニング、体操、ストレッチ</p> <p>4. 本時の説明を聞く：前回までの学習を思い出し、練習で注意する点を確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3コート分の準備をする。</li> <li>・できる仕事を分担し、協力して素早く準備する。</li> <li>・はっきりと元気よく挨拶をさせる。</li> <li>・かけ声を合わせて列を揃えて走る。</li> <li>・号令に合わせて大きな動きをさせる。</li> <li>・身体の伸ばす部分を意識させる。</li> <li>・見本通りの動きができるように支援する。</li> <li>・力任せで打つのではなく、できるだけ長くラリーを続けることが目標で、それができたら試合をする流れを伝える。</li> <li>・ガット面を正面にし、肘を高く上げて構えることを注意する。</li> <li>・続けるためには相手が返しやすい場所に狙って打つことが大切であることを考えさせる。</li> </ul>	<p>人間関係の形成</p> <p>コミュニケーション (1)</p> <p>健康の保持 (4)</p> <p>心理的な安定 (1)</p>
展 開 35分	<p>5. 教師を相手にラリーの練習をする。</p> <p><b>【グループに分かれての活動】</b></p> <p>6. ラリーを続けて打ち合う練習をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・打ち返ししやすい球筋に返球しながら個別指導し、各自のスキルを向上させる。</li> <li>・20～30回以上続いたら生徒同士の自主練習に移行させる。</li> <li>・教師とラリー練習を続けるグループAと生徒同士での自主練習をするグループBとに分かれる。</li> <li><b>【グループA】</b>生徒たちは交代しながら教師と打ち合う。</li> <li>・ガット面が常に正面に向くように注意させ、ラケットを垂直に上げて構えの姿勢をとるように指示する。</li> <li>・額の上の高い打点で手首を使い強く打ち返すように指示。</li> <li>・上手にできた時はほめる。</li> <li><b>【グループB】</b>生徒たちと支援員は2人1組で打ち合う。</li> <li>・力任せにいきなりスマッシュをする打ち方ではなく、30回以上を目標に長くラリーを続ける打ち方を意識させる。</li> <li>・スキルが優れている方が相手を思いやり、返球を調整しながら、できるだけラリーを続けられるように練習する。</li> </ul>	<p>心理的な安定 (2)</p> <p>心理的な安定 (3)</p> <p>人間関係の形成 (1)</p> <p>人間関係の形成 (2)</p>

	7. ペアを組んで2対2のダブルス戦を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様子を見てペアリングの変更をし、できそうな生徒同士はラリーで50回以上を目標に打ち合うように指示する。</li> <li>・一度もシャトルを落とさなかったペアを褒める。</li> <li>・シングルス試合形式で練習させる。(サーブやバックハンド)</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教師は審判をしながら、声かけや動きに対しての指示などを行いながら、集団として楽しいゲームの雰囲気づくりに配慮する。</li> <li>・試合を待つ間は、得点係をしたり、指定場所で他の生徒の試合を見学・応援したりするように指示する。</li> <li>・勝負にこだわり、相手の準備ができていないのにサーブを打ったり、勝った時は負けた相手に対して自慢したり、負けた時は味方ペアのミスに文句を言ったり、物に当たったり、諦めたような行動が見られた場合は、様子を見ながら集団で活動するときの基本的なルール(マナー)を守るように自立活動的な内容の指導を入れる。</li> </ul>	<p>心理的な安定 (3) 人間関係の形成 (2)</p> <p>心理的な安定 (1) 人間関係の形成 (4)</p>
まとめ 5分	<p>【全体での活動】</p> <p>8. 片付け</p> <p>9. 振り返り</p> <p>10. あいさつ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ネット外し、支柱運び、ネットたたみ、窓締め等の各自ができる仕事を分担し、協力して素早く片付けをさせる。</li> <li>・集合させて今日の授業を振り返り、各自の頑張った点や向上した点、課題点を明らかにする。</li> <li>・よくがんばって活動できたら褒める。</li> </ul>	<p>人間関係の形成 (3) コミュニケーション (1) コミュニケーション (2) コミュニケーション (5)</p>

### (3) バドミントンにかかわる活動の様子

最初はラケットの扱いに慣れず苦労したが、諦めずによく練習した。ミスをして他の場面で見られるような自己否定的な発言はなく、気持ちを切り替えて次のプレイに移ることができた。慣れてくるにしたがって体力や運動量も向上し、ゲームの中でラリーを続けられるようになった。生徒同士でゲームを楽しめるようになると、自分に自信がもてるようになった。上手にスマッシュや力を抜いた返球などを打ち分けることができるようになった。勝負にこだわり過ぎて、ペアのミスを責めたり、負けそうになると諦めたようなプレイになることも見られたが、全体的には意欲的に生き生きと活動し、笑顔も多く見られるようになり、ストレスを軽減できてきたのではないかと考える。

### (4) バドミントンの授業の成果と課題

特別支援学級の一人一人にさまざまな課題があるものの、運動を通して、情緒の安定を図ったり、人との関わり方を学ばせたりしながら成長を見守り、一人一人の状態に合わせてつつ支援することができたのではないかと考える。週1, 2時間の授業であるが、ゲームや軽スポーツに親しむことで情緒の安定が図られているのは確かである。

どの生徒も粘り強く練習に取り組むうちに、ラリーを続けられるまでに上達し、その楽しさを実感するようになった。特に、試合形式にしてから最初は「勝って楽しかった」という感想が多かったのが、「負けても楽しかった」「友だちと一緒に活動できたのが楽しかった。またやりたい」と、連絡帳の1日の反省欄に書くようにもなった。スポーツの楽しさを知り、苦手意識が強かった運動に自信をもったことで何事にも意欲的に取り組むようになったり、落ち着いて学校生活が過ごせたりできるようにもなった。毎回授業の終わりの会で、ゲーム中での自分の言動を振り返り、自分の思い通りに進まない場合にイライラしてしまう自分自身を客観的に見ることが少しずつできるようになってきている。ペアや相手の気持ちを考えながらどのような言動をとったらよいのかを学んでいるのも確かである。

生徒たちが獲得したのは単なる運動技能だけでなく、仲間とのチームプレイ、参加することによる自信、充足感、自己実現など、今後の成長の基盤となるものであった。運動指導で生徒たちの可能性は広がることを強く実感した。体育に限らず、数学や国語、全ての教科指導がこのように「生きるための実学」となるような指導をしていきたいと考える。

今後は、学校生活のルールを守らせつつ、ある程度のストレス状況においても自分の気持ちをコントロールして過ごせるようになることが課題である。

また、能力差がある交流学級での体育でも、特別扱いされる存在ではなく、個性ある仲間の一員として一緒に生き生きと運動に参加でき、より大きい集団の刺激の中で社会スキルをより多く効率よく習得していけたらとよいと感じている。

## V. まとめと今後の課題

現在、中学校特別支援学級に在籍している生徒は、小学校でも知的障害特別支援学級に在籍していてそのまま進学してくる「軽度の知的障害」の生徒のほかに、LDやADHDなどの発達障害の生徒、学習上や生活上に何らかの困難を感じて途中入級してくる生徒などさまざまである。

中学校特別支援学級の課題はいくつかあると感じている。その一つの課題が教育課程である。中学校知的障害特別支援学級の教育課程は、国語と数学を中心に社会や理科、外国語の基礎的な内容を扱うことが中心とされているものがほとんどである。その理由として、以下のことが考えられる。特別支援学級に在籍していても、特別支援学校ではなく、高校進学を強く希望する場合、高校入試を目指して各教科の内容を扱わなければならないからである。また、特別支援学級の授業を担当する教科担任の多くが、特別支援教育に関わった経験年数が少ないため、自分自身が十分に理解している「通常の学級における教科中心の教育課程」を特別支援学級にも準用していることからきていると考えられる。

そのことによって、中学校特別支援学級に在籍する生徒は、通常の学級の学習内容を受け身的に程度を下げながら学んでいるといった状況が多い。しかし、高校入試を目指して、

各教科の内容を扱うことが中心とされているわりには、十分な基礎的知識を習得することが難しく、試験での得点になかなか結び付かず、結果的に高校進学につながっていない。このように、通常の学級における教科中心の教育課程を準用することには無理がある。

もう1つの課題は、通常の学級との交流にかかわることである。中学校特別支援学級に在籍する生徒は、それぞれの実態に合わせてながら、通常の学級で教科の学習を行う。修学旅行や学園祭、合唱祭などの行事では、当日だけでなく、事前事後の取り組みにも参加している。そのため、通常の学級の時間に合わせて特別支援学級の時間割を組んでいることが多く、特別支援学級に在籍する生徒全員が揃う時間を設定することが難しくなっている。また、特別支援学級担任も通常の学級での教科指導を担当していることが多く、特別支援学級の担任と生徒全員が一つの学級として、実際の・具体的な活動に取り組むことが少なくなりがちで、生徒の社会参加や自立を見据えた、生活に根ざした教育を十分に指導できていないのが現状である。

これらのことから、筆者は次の点を意識して、中学校特別支援学級の経営を行っている。一つは、中学校には高校入試という関門があり、特別支援学級に在籍していても特別支援学校ではなく、高校進学を強く希望する保護者がいるのも事実なので、そのような場合、保護者の要望にも応じながら入試科目の教科指導への個別対応を心掛けることである。もう一つは、特別支援学級に在籍している個々の生徒たちの社会参加や自立を見据えた、生活に根ざした教育も展開していきながら、一つの学級集団を作っていくということである。

しかし、未だに、特別支援学級は通常の学級で学習についていけない生徒の受け皿という感覚から抜けきれない人がいる。だからこそ特別支援学級をもっと充実させなくてはいけない。質の高い学びを保障したい。教師は生徒の将来に責任をもち、生徒たちに、この社会に当たり前に「参加」するための教育を提供したい。自分の意見を表明する力をつけるとともに、仲間とともに学ぶ機会を保障し、自分の意見を対等に受け止めてもらえる経験を保障していきたい。生徒たちが、学校の中で、そして社会に出てからも、周囲の人々と対等に渡り合えるよう育て上げていきたい。

現在のNは、入学当初に心配していた不登校にもならず、毎日元気に登校し、特別支援学級で能力にあった生活・学習の支援を受けながら、楽しく充実した学校生活を送っている。バドミントンや自転車などの軽い運動を楽しめるようになり体力も向上し、2年生からは保護者の送迎ではなく、バスでの自力通学ができるようになってきている。学習面でも確実に力をつけ、抽象的な数学の内容も理解し、操作が複雑な計算や文章問題も解けるようになり、時折挙手して発言する様子も見られる。少しずつ自信をもち、何事にも前向きに取り組むようになってきた。今年度行われた市内にある特別支援学級合同林間学校では、キャンドルサービスの司会を担当したり、「詩の群読」発表では豊かに表現をして、多くの拍手の中で満足感や感動を味わった。「自分にもできるんだ」という自信をつけたようであり、確かな成長を筆者は実感している。

筆者が授業を大切にしているのは、生徒が学ぶ喜びを体験して、力をつけ、自立に結び

つくことを期待するからである。大切なことは、学習意欲を低下させないことで、苦手なことであっても、「できた」「わかった」という体験ができるような配慮を忘れず、これまで記してきたようなことを常に意識しながら支援をしていくことができれば、必ず成果が見える。目に見えて成果が上がり、生徒の表情が輝くようになると、指導はますます楽しくなってくる。

今後も、「授業の充実こそが最大の特別支援教育である」という信念で、学習活動そのものが「おもしろそう、やってみたい」と思える教材を設定し、学習意欲を高め、集団の中での個別化を図りながら、各自の課題を乗り越えられる授業を工夫していきたい。いろいろな場面でその子らしさを発揮させ自己実現ができるように、常に励まし、自信をもたせるように努め、一人一人のよさを認め合える機会を積極的に設けていきたい。

### **授業づくりで参考にした文献**

- 1) 伊藤葉子（2007）「特別支援の算数教材」初級・中級編．学習研究社．
- 2) 赤塚智美（2009）「特別支援の算数教材」上級編．学習研究社．
- 3) 佐藤 暁（2012）入門：特別支援学級の学級づくりと授業づくり．学研教育出版．
- 4) 湯浅恭正 編（2008）よくわかる特別支援教育．ミネルヴァ書房．
- 5) 新井英靖・高橋浩平（2008）特別支援教育の実践力をアップする技とコツ68．黎明書房．
- 6) 九重 卓（2006）基礎基本をおさえた発達障害児の運動指導．明治図書．
- 7) 中尾茂樹 編（2009）みんなの自立活動：特別支援学級編．明治図書．